博物館学雑誌 第28巻 第1号（通巻37号）25～44ページ 2002年12月

【論文】

1872年の岩倉使節団によるスミソニアン・インスティテューション視察
—明治初年における西洋の自然史博物館受容過程—

Observation of the Smithsonian Institution by Members of the Iwakura Mission (1872)
—How did the Japanese receive Western Museums of Natural History in the Early Meiji Era?—

財 部 香 枝*
Kae TAKARABE

Abstract: Members of the Iwakura Mission visited the Smithsonian Institution, Washington, D.C., in 1872. The mission was the first official one of the Japanese Government to visit twelve Western countries, after the Meiji Restoration, and to learn from their advanced civilization. Japanese students of museum history have paid less attention to this visit to the American institution beside more interests to those to European museums, such as British Museum and others. The author shows here the members' activities at the institution by register books of visitors left in the Institution Archives, published diaries of members, and American journals at the time. The register books revealed us a date and a name of real visitors. Another aim of the author is to talk a hypothesis on a members' comprehension of the museum and scope to prepare an our national museum in near future, using a date on an organization and an administration of the Institution and the museum.

はじめに

岩倉使節団は、1871（明治4）年12月23日に横浜を出港し、約1年10ヵ月にわたって欧米12カ国を歴訪した後、1873（明治6）年9月13日に横浜に帰港した。出発時の同使節団は総勢46名からなり、このほか留学生42名、随従15名が加わって、総勢100名を突破した。これをして、「明治維新期における、いわゆる遣外使節の最後にして、また最も大規模なものである」とされる（大久保 1976：9）。

これまで、岩倉使節団の研究は数多くなされてきた。田中（2002：1-13）は、同使節団の研究史を、戦前および戦後の4期に区分して以下のように論じる。戦前（-1945年）は、外交史的視点が特徴的であり、戦後第1期（1945-60年）も、そのような外交史的研究の延長線上にあった。第2期（1961-75年）は、外交史研究に幅が出てきたほか、思想史、比較文化史的研究の登場が特徴的である。

第3期（1976-90年）は、本格的な歴史的研究が急速かつ幅広く展開した。これは、久米邦武編『特命全権大使米欧回覧実記』（1878、以下『実記』）が、1975-76年に覆刻・出版され（宗高書房）、続いてこれが1977年から82年にかけて岩波文庫として刊行さ

＊中部大学中部高等学術研究所研究員

平成14年7月17日受理

れたことを受けている。こうした中、使節団の組織や歴訪各国別の検討も開始され、政治史的な研究は言うまでもなく、宗教、音楽、科学等、これまで看過されてきた分野まで分析がなされるようになったという。また、使節団が歴訪した現地を訪ねて追認されることが多くなると同時に、「現地史料」の「発掘と分析」によって新たな分析がなされはじめたことも特徴として挙げられる。これに関連し、研究の学際化、国際化がみられはじめた。

第4期（1991年–現在）は、『実記』の基礎史料の整備・研究、およびその編修者久米邦武の研究が進展した。たとえば、『久米邦武歴史著作集1－5』（1988–1991）に続いて、久米美術館編『久米邦武文書1－4』（1999–2001）が刊行され、久米邦武の実像が浮き彫りにされると共に、岩倉使節団の研究がさらに進展する道が拓かれた。また、『『米欧回覧実記』の学際的研究』（田中・高田 1993）および『『米欧回覧実記』を読む』（西川・松宮 1995）をはじめとする学際的・国際的研究の成果が公刊されはじめた。これらに加え、『実記』全巻の英訳本*The Iwakura Embassy 1871-1873*（Kume 2002）が刊行され、さらなる国際的研究の進展が期待される。

このような研究動向を受け、岩倉使節団による博物館視察に関する研究もまた、近年深化してきている。すなわち、学際的なアプローチから岩倉使節団の特定の博物館視察を取り上げる研究が現れてきているほか（松宮 1993、長島 1993、中野 1993、武田 1993）、博物館史における岩倉使節団の意義に論及したものも見られるようになってきた（岩本 1998–1999、2000）。しかしながら、これらは大英博物館をはじめとするヨーロッパの博物館およびウィーン万国博覧会に焦点が定められており、アメリカの博物館が主題として取り上げられることは管見のかぎり皆無である。本稿の目的は、これまで看過されてきた岩倉使節団によるアメリカの博物館の視察状況を明らかにし、博物館史上において同使節団の意義を再評価することである。

具体的には、岩倉使節団によるスミソニアン・インスティテューション（Smithsonian Institution）、およびその博物館の視察を探究する。筆者は、これまでに、万延元（1860）年遣米使節団によるスミソニアン・インスティテューションの視察状況、すなわち、誰が、何を実見し、何を記録したのかを具体的に示した（財部 1998、1999、Takarabe 2000）。本稿は、西洋の博物館受容過程におけるアメリカの影響を明らかにして、日本の博物館史に新たな知見を提示しようとするものであり、筆者のこれまでの研究に続くものである。

本稿は、スミソニアン・インスティテューション・アーカイブス（Smithsonian Institution Archives）所蔵および合衆国議会図書館（Library of Congress）所蔵の新聞史料を用いるものであり、方法論的には現地史料の掘り起こしによる岩倉使節団研究の一環として位置づけられる。

1．1872年当時のスミソニアン・インスティテューションおよび博物館

従来の博物館受容研究は、受容する側の日記分析に終始する傾向が見られた。しかしながら、博物館観を正確に引き出すためには、「何を」受容したのかという受容物の実態を明らかにした上で、それと受容者の記録とを比較・対照することが肝要である（財部 1998：178）。田中・高田（1993：97）所収「『米欧回覧実記』索引」の「『米欧回覧実記』技術関連項目解説分類集成」の「博物館」では、原典記述「器械諸件モ備足」がSmithsonian Institutionとして同定され、スミソニアン・ビルディングの大半を占めていた「玻璃室」は取り上げられていない。この事例は、現代の岩倉使節団研究者が、『実記』のみを用いて受容物の実態を把握することがいかに困難であるかを浮き彫りにするものである。こうした状況下、前述した『実記』の英語版は、人名、地名、機関名の原綴りを提供するものであり、使節団員が実際に受容したものを正しく同定する上での手引きとなり、重要な資料であると言える。また、久米の誤認、誤記を確認する上でも、不可欠なものだろう。このような点を踏まえ、以下では、岩倉使節団が実見した同インスティテューションおよび博物館の実態をまず明らかにしたい。

スミソニアン・インスティテューションが、現在16の博物館・美術館、国立動物園、および多数の研究施設からなる複合体であり、世界有数の総合研究機関であることは周知のとおりである。しかしながら、岩倉使節団が実見した1872年当時は、広大な敷

地内に今日「キャッスル」として知られるスミソニアン・ビルディングが建っているのみであった（建物の回りには木々が植えられていた）。

同インスティテューションは、イギリス人科学者ジェームズ・スミソン（James Smithson）が「スミソニアン・インスティテューションという名の下に、人類の知識の増進と普及を目的とした機関をワシントンに設立するため、アメリカ合衆国に」全財産を寄贈するとして残した莫大な遺産に基づき、1846年8月10日付議会条例によって発足した。

「理事は当該地を選んだ後すみやかに、地質学や鉱物学を含む博物学の対象物の受入と整理のための任意の規模の適切な部屋やホール、および化学実験室、図書室、画廊、必然的な講義室を伴う……適切な建物を建設させることを定める」という上記条例に従って、スミソニアン・ビルディングは、1847年に着工して1855年に完成した。2階建て本館、東西翼、および9つの塔からなるロマネスク様式で赤い砂岩からできていた。

岩倉使節団が訪れた1872年は、1846年に同インスティテューションが発足してから、四半世紀が経過し、またスミソニアン・ビルディングが完成してから15年あまりが経った時であった。

(1) 博物館機能の拡充

スミソニアン・インスティテューションの初代長官ジョセフ・ヘンリー（Joseph Henry）は、スミソンの遺産を博物館運営に充てることに反対であった。彼は、知識の「普及」よりも「増進」の方が同インスティテューションの使命として重要であると考えた。知識の「増進」はオリジナルな科学研究によって推進され、知識の「普及」は学術出版によって国内外で遂行されうるとした。これに対し、既得の知識を保管する博物館は知識の「増進」には繋がらないし、博物館の知識の「普及」はワシントン近郊の人々に限定されると考えた（Moyer 1997：249-252、Rivinus & Youssef 1992：57）。ヘンリーのこのような考え方を受け、同インスティテューションは、当初は博物館運営に消極的であった。しかし、岩倉使節団が視察した1872年頃までに、博物館機能が質的にも量的にも拡充し、現在の博物館を中心とする複合体としての基盤が固まりつつあった。そのような変貌を遂げる契機として、以下の3点を挙げることができるだろう。

第1の契機として、政府コレクションの移管が挙げられよう。政府の探検隊・学術調査隊によってもたらされた博物学のコレクション（ペリーが日本から持ち帰ったコレクションも含む）は全て、国立科学振興協会（National Institute for the Promotion of Science）の名のもとにパテント・オフィス（Patent Office）に保管されていたが、このようなコレクションの増加に伴い、1857年3月、議会はそれらをスミソニアン・インスティテューションに移管することを決定し、新ケース購入やコレクション移送費用のほか、維持費として毎年4000ドルを支出することを認めた。こうして1858年同インスティテューションは政府の博物学の標本を受け入れて展示することになった。ここに、合衆国国立博物館が創設され、副長官スペンサー・F・ベアード（Spencer F. Baird）が博物館の管理・運営に関わるようになった（Henry 1859：13-15、Baird 1859：52-59、Rivinus & Youssef 1992：64）。これを契機に、博物館機能が着実に拡充されていくこととなる。なお、ヘンリーが国立博物館という用語を用いたのは1870年のスミソニアンの年報が最初であり、議会がそれを用いたのはその4年後の予算案が最初である（Yochelson 1985：15）。

1860年当時のスミソニアン・ビルディングの様子をここで簡単に紹介しておきたい（詳細は財部1998、1999、Takarabe 2000を参照）。本館1階の大部屋（長さ61×奥行き15×高さ8メートル）およびその中2階は博物館（Museum Hall）に充てられ、標本は垂直型のガラス・ケースに保存されていた。同博物館は、動植物、鉱物、人類学的資料を扱う、自然史博物館であった（財部1998：177）。本館2階中央には講義室（Lecture Hall）があり、音響効果に配慮して造られ、座席は扇形をしていた。講義室の東の機械室（Apparatus Room）には、ロバート・ヘア博士（Dr. Robert Hare）から贈呈された電気の機械などが置かれており、それはアメリカにおける科学の発展の歴史を想起させる興味深いものであった。講義室の西の画廊（Gallery of Art）には、ジョン・スタンレイ（John Stanley）による北米先住民の肖像画が収められていた。西翼には図書室（Library）があり、それに続く西レインジは博物館の拡張であっ

た。東翼には長官邸や出版物・博物学標本のための倉庫があり、それに続く東レインジには実験室(Laboratory)、事務室があった。塔には理事室、長官室、倉庫、作業場があった。また、敷地内に磁気観測所もあった。このように博物館、機械室、図書室、画廊、講義室、実験室を含むスミソニアン・ビルディングは、前述したスミソニアン・インスティテューション発足の際の条例に沿うかたちとなっている。現在に比べると規模こそ小さいが、同インスティテューションは、天文学、地理学、気象学、地質学、植物学、生理学、比較解剖学、動物学、(記述的な)博物学、地磁気、アメリカの遺物、(先住民の言語との)比較言語学等、幅広い研究を推進する総合的な研究機関であった(Rhees 1857:8-27)。

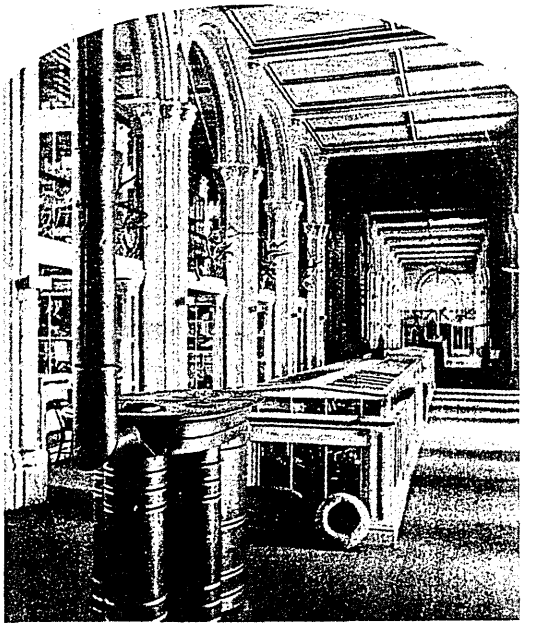
第2の契機となったのは、1865年1月24日の火事である。その火事によって、本館2階の講義室、機械室、画廊は全焼し、その他にもスミソンの個人的な所有物やスミソニアン・インスティテューション発足以来の公式記録、書簡などを焼失した(Henry 1866:14-19)。本館1階の天井は不燃性物質による耐火構造であったので、2階の火事の影響によって煙と水による損害を被ったものの、コレクションを焼失することはなかった(Henry 1866:66-67)。

火事の後3日のうちに、この1階のコレクション保護のために一時的な屋根が架けられ、1867年春には鉄製スレート葺屋根となった(Field, al. 1993:79)。火事の後も、議会から毎年4000ドルしか充当されなかったため、このような本館修復の費用(家具を除くベース136000ドル)は全額スミソニアン・インスティテューションから支払われた(Henry 1873b:42)。

一方、南北戦争の間(1861-65年)、政治関係で講義室を使いたいと請願する人が増加したために、ヘンリーは、本館2階部分を講義室として再建しないことを決めた(Field, et al. 1993:80)。ヘンリーは、国立博物館の管理費用は同インスティテューションではなく政府が支払うべきだと考えていた(Henry 1866:22)。彼は、同インスティテューションの費用で本館2階部分を博物館として整備したくはなかったので、約6年もの間、2階部分は未完成のまま放置された(Henry1871:13)。この結果、本館2階に、将来に向けての潜在的な博物館用スペースが創出されたのである。

このほか、上記議会条例によって、スミソニアン・インスティテューションは図書室を保有することとされていたが、1865年の火事がきっかけとなり、1867年に図書コレクションの管理は議会図書館に移された(Rhees 1869:13)。その後、西翼は公開されずに、アルコール保存の博物学標本や配布用のduplicate標本が保管されていた(Field, et al. 1993:73)。また、1868年、西レインジに北米先住民の作品などの人類学標本が展示され、中国、日本、先史時代のフランスなどの文化的工芸品が比較のために展示されていた。また、アーケードに沿って、先住民の肖像画が掛けられた(Field, et al. 1993:105)(写真1)。

写真1　本館1階のグレート・ホール



出典:Hafertepe (1984)

このように、1865年の火事以降、スミソニアン・ビルディングから講義室、図書室が取り除かれるかたちとなり、潜在的な博物館スペースが生じることとなった。このスペースこそ、同インスティテューションの博物館としての機能が拡大する道を拓くことになったのである。

第3の契機として、1870年以降、議会予算が博物館に割り当てられるようになったことが挙げられよう。それ以前は、スミソニアン・インスティテュー

ションが管理する博物館は、主にスミソンの遺産に依っており、議会は毎年4000ドルしか充当していなかった。ようやく1870年になって、議会は、国のコレクションの保存・展示のために博物館を拡充することとし、前年比倍増以上の10000ドルの歳出予算を認めた。さらに、それらの標本のより良い管理・展示のための本館2階の整備に向けても1871年に10000ドルが認められる見通しであった。それが同インスティテューションにとっていかに画期的なことであったかは、次のヘンリーの発言から明らかである。

> 1870年はスミソニアン・インスティテューションの歴史におけるほとんど新時代とみなされるだろう。なぜなら、今年、国立博物館の維持・管理において当初から負わされてきた負担の少なくとも一部をスミソンの遺産から軽減するために、議会が適切な歳出予算のような何かをするという妥当性を認め始めたからである(Henry 1871：13)。

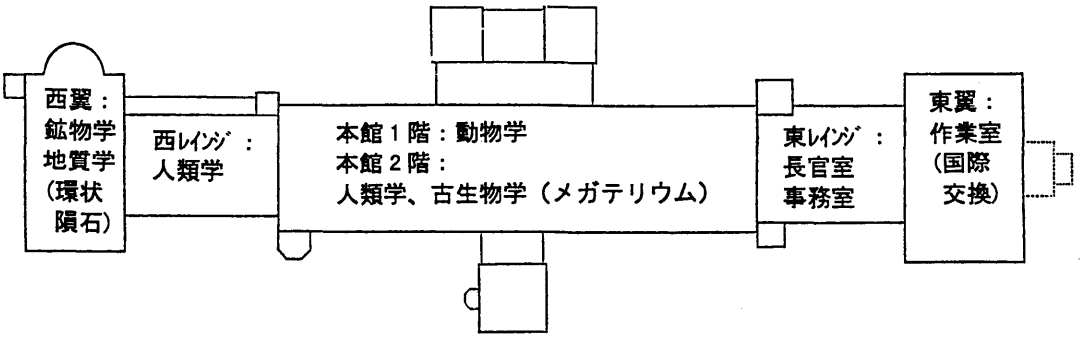
実際1871年にも10000ドルの予算を受け、それに伴い、スミソニアン・インスティテューションの固有業務と国立博物館業務との分離が図られることとなった。すなわち、(理事の部屋を除いて) 東翼と東レインジは同インスティテューションの本質的な事業を執り行うように、一方、本館、西翼、西レインジ、塔は博物館に適するように整備された。具体的には、以前博物館の実験室や貯蔵庫だった東翼1階の大部屋は、同インスティテューションの固有業務である国際交換業務に適するように整備された。東レインジ1階から化学実験室をその下の地下室へ移すよう準備がなされ、1階部分は長官などの事務室にすることとなった。前述したように、大火の後、図書コレクションは議会図書館に移管されていたので、図書室だった西翼の大部屋は博物館とすることになり、鉱物学・地質学標本用のケースを受け入れる準備をした。1871年4月西翼に防火床を導入するにあたり、その下の床の高さが増して、地下のスペースにはアルコール漬けの魚類、爬虫類、無脊椎動物が保管された。一方、本館2階の大部屋 (60×15メートル) が完成し、人類学標本用のケースを受入れる準備が進められた (Henry 1873a：38、Field, et al. 1993：104)。その部屋は、1階のような柱がないので展示スペースとして好都合であるとヘンリーも評価した (Henry 1871：35) (図1)。

1872年には、15000ドルの予算が議会から割り当てられ (Henry 1873b：42)、1870年からの3年間で総額35000ドルの予算が充当された結果、本館2階の大部屋および西翼やそれに続く西レインジが整備され、博物館スペースは大幅に増加した (Henry 1873a：39)。すなわち、岩倉使節団が視察した1872年は、博物館スペースが拡大している時であり、それに伴って、博物館機能が質的にも量的にも拡充している時であった。

(2) 博物館コレクション

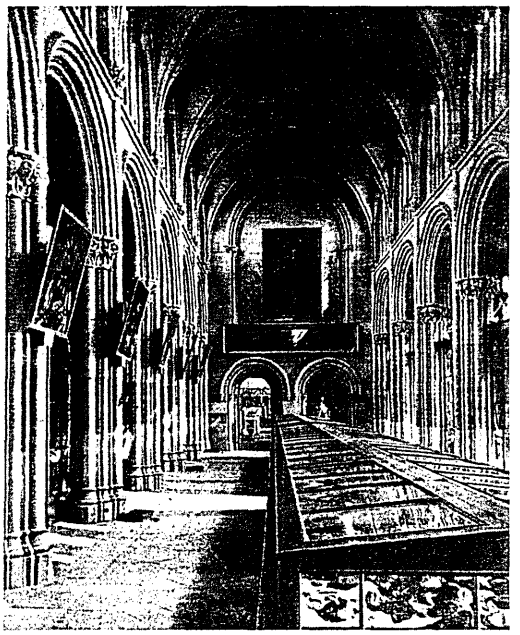
続いて、岩倉使節団員が実見したコレクションの内容を概観したい。前述したように、本館1階のホールは1865年の火事の影響をほとんど受けなかった (写真2)。そのため、1863年、1869年のスミソニアン・インスティテューションのガイドブック (Rhees

図1　スミソニアン・ビルディングの標本配置



出典：*Annual Report of Smithsonian Institution*, Field, et al. (1993) を基に作成

写真2　西レインジ



出典：スミソニアン・インスティテューション・アーカイブスのご好意による

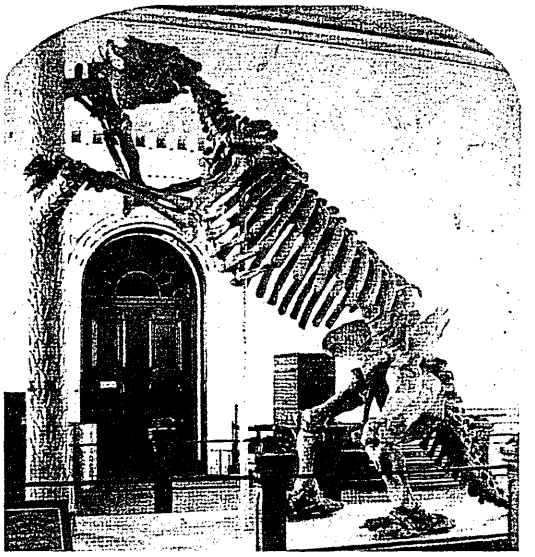
1863、1869）に見られる1階、中2階の博物館ホールの標本配置の説明は全く変わっていない。それらによると、1階には、哺乳類、鳥類、爬虫類、魚類、貝類など動物コレクションが展示されていた。また、中2階には、鉱物学、地質学、古生物学のコレクション、東インド諸島、中国、日本、南米、アフリカなど人類学コレクションが展示されていた（詳細は財部1999：75-76を参照）。前述のとおり、1870年以降の議会予算は2階部分の修復や西翼に使われ、本館1階・中2階には使われなかったことを勘案すると、岩倉使節団も概ねこのコレクションを実見したと考えられる。なお、人間の頭蓋骨は陸軍医学博物館へ、また植物コレクションは農務省へ、それぞれ移管された（Henry 1871：29、36）。

南北戦争後の1860年代後半以降、アメリカ先住民の古物を中心とした人類学標本が急増した。その理由としては、第1に、ヨーロッパにおいて考古学が発達したことが挙げられる。ヘンリーは、アメリカの古物の探究は、北米における人間の歴史を再構築する基盤をもたらすであろうと考えるようになり、このようなヘンリーの関心を反映するかたちで、博物館は積極的に人類学コレクションを受け入れるようになっていった。第2に、合衆国領土がミシシッピ川以西へと拡大したことが挙げられる。領土拡大に伴い、様々な政府探検が行われるようになった。とりわけ地質学者のハイデン（Ferdinand V. Hayden）、パウエル（John Wesley Powell）は、膨大なコレクションをもたらした。なお、当時の人類学コレクションを作ったのは、博物学者や探検家であり、人類学者ではなかった。このため、そのコレクションは、大衆の関心は喚起したものの、体系的ではなかったという指摘もある（Hinsley 1981：67-71）。

これらの人類学コレクションは、1871年以降漸次、本館2階の大部屋に移されて、文明生活の技芸の漸進的進歩やその関係を示すとされていた。なお、2階の大部屋の一部はジョージ・キャトリン（George Catlin）による数多くのアメリカ先住民のスケッチを展示していた(Henry 1873a：40)。

本館2階の展示で特筆すべきなのは、1871年以降、ニューヨーク、ロチェスターのウォード（Henry A. Ward）から購入した3つの巨大な絶滅動物の化石標本（複製）が組み立てられ始めたことである。そのうちの1つであるメガテリウム（Megatherium）は、更新世後期にかけてアメリカ大陸に生息したとされ

写真3　本館2階のメガテリウム



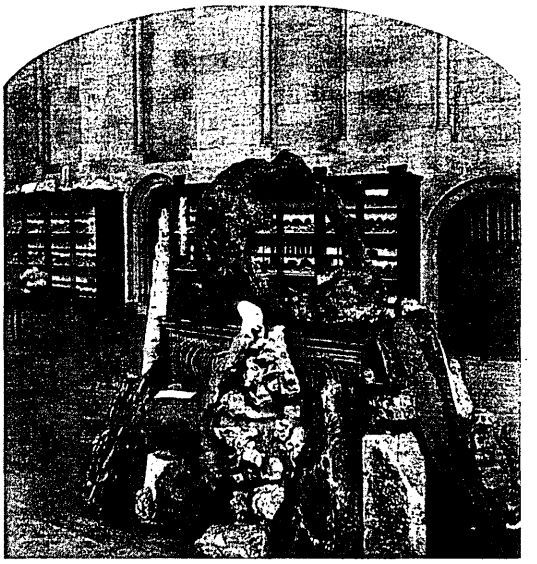
出典：スミソニアン・インスティテューション・アーカイブスのご好意による

る異節目有毛亜目メガテリウム科の地上性ナマケモノ類であり、手足に巨大な鉤爪をもつ。展示された標本は、骨格の長さが5メートル、台から第1脊椎の棘突起までの高さが3メートルという巨大なものであり、ホール中央に置かれていた（写真3）。オリジナルはアルゼンチンのブエノスアイレス付近で発見されたものである。このほか、インドで発見された鮮新世の巨大なカメ、コロッソケリス（Colossochelys atlas）の化石標本（複製）——長さ2.5メートル、幅1.5メートル——や、更新世に南米に生息した異節目被甲亜目グリプトドン科で背甲が1枚板のグリプトドン（Glyptodon）も組み立てられた（Henry 1873a：39-40、富田 2002）。このような巨大化石標本は、当時日本では展示されておらず、岩倉使節団員の注意を喚起するに十分だったと考えられる。

1871年西翼に鉱物・地質学コレクションが展示されるようになったことに伴い、環状の直径1.2メートルの巨大隕石（写真4）が、その中央に置かれ、衆目を集めるようになった。これは、1863年アリゾナのテューソン南部からスミソニアンに運ばれたものであるが、1871年までは本館1階の片隅に展示されており目立たなかった（Field, et al. 1993：57、103、Rhees 1869：19）。この巨大隕石もまた、岩倉使節団の関心を惹いたであろう。なお、この隕石は、今日でも合衆国国立自然史博物館2階に展示されている。

以上のように、岩倉使節団が訪れた1872年は、同インスティテューションにおける博物館機能が質的にも量的にも、拡充している時であり（表1）、博物館を中心とする複合体としての基盤が固まりつつあった。博物館の管理に関わってきたベアードがその専任となることを、ヘンリーが認めたのも1872年であった（Rivinus & Youssef 1992：122）。

写真4　西翼（中央は環状の巨大隕石）



出典：スミソニアン・インスティテューション・アーカイブスのご好意による

表1　博物館における年次別コレクション登録数

	1861年	1862年	1863年	1864年	1865年	1866年	1867年	1868年	1869年	1870年	1871年	1872年
骨格・頭蓋骨	109	291	864	661	334	491	400	650	1,558	1,804	547	391
哺乳類	975	350	1,275	607	634	269	215	400	216	257	76	1,346
鳥類	2,635	2,647	5,643	3,311	5,443	4,446	5,000	4,000	4,976	2,174	100	1,468
爬虫類	1,405	223	14	218	1	38	568	50	317	18	1	1,193
魚類	668	1,282	150	329	184	3	34		2,260	12	86	1,775
鳥類の卵	405	1,170	1,275	1,425	1,239	461	2,900	800	1,400	171	315	336
甲殻類	308											900
軟体動物	886	282	450	75	7,578	397			3,270	575	2,447	
放射相称動物	492	875	39	11						5		377
環形動物	105	4	1						-10			
化石	326	1,069	450	2,937	420	13	680	600	83	97	317	18
鉱物	2,368	225	751	449	15	1	209	1,475	352	177	6	7
民族学標本		275	50	173	77	1,135	3,140	2,000	1,833	767	931	676
計	10,686	8,689	10,962	10,196	15,925	7,254	13,046	10,075	16,255	6,057	4,826	8,487

出典：*Annual Report of Smithsonian Institution*から作成

ここで、博物館の展示に関わってきたベアードと進化論について敷延しておきたい。ベアードはダーウィンの自然選択理論を熟知していたが、ダーウィニズムに関する立場を公表しなかった（Rivinus & Youssef 1992：65-66、107-108 ）。彼は、ハーバード大学・比較解剖学博物館のルイ・アガシ（Louis Agassiz）とは異なり、生物学標本の理論的分析を追求したり、壮大な分類枠組みを発展させたり、生命形態を説明するための理論的機構を提案したりすることは決してなかったのである。彼は、探検によってもたらされた標本に関する報告書や国立博物館の哺乳類・鳥類コレクションのカタログのような国のコレクションの膨大なカタログを出版することに傾注した。ベアードは、個人的な研究プログラムを推進するためにコレクションを蓄積したのではなく、博物館を形成する上で自然資源を確立するために収集したのである（Henson 2000：114)。

2．岩倉使節団員によるスミソニアン・インスティテューション視察

『実記』および『木戸孝允日記』(1967、以下『木戸日記』）等の国内史料に基づく先行研究によって、副使の山口尚芳や木戸孝允がスミソニアン・インスティテューションを視察したことは明らかにされていた。筆者は1999年７-８月のスミソニアン・インスティテューション・アーカイブス（以下SIA）調査時に、訪問者名簿『レジスター・オブ・ビジターズ』(Resister of Visitors、以下『レジスター』）の中に、岩倉使節団員の署名があることを発見した。同史料は、３月30日から５月28日までの２ヵ月間が紛失しているため、不完全ではあるものの、使節団員の視察状況を垣間見ることができる。同史料および新聞史料を調査した結果、延べ23名の使節団員およびアメリカ滞在中の留学生ら20名が同インスティテューションを訪れていることが判明した（表２)。以下で

表２　岩倉使節団員のスミソニアン・インスティテューション視察日程

見学日（陽暦）	氏　　名	『レジスター』の署名	使節団職名	官　名	出　身	年齢	備　　考
2月28日	(トダ)	Mis M Toda					不詳（戸田五郎？）
3月 1日	山田顕義	A Y Yamada	理事官	陸軍少将	山口	28	
	長野桂次郎	K Nagano	二等書記官	外務七等出仕	幕臣	29	
3月 4日	田中光顕	M Tanaka	理事官	戸籍頭	高知	29	
	中山信彬	N Nakayama	大使随行	兵庫県権知事	佐賀	30	
	杉山一成	K Sugiyama	田中光顕理事官随行	検査大属	幕臣	29	
	冨田命保	N Tomita	田中光顕理事官随行	租税権大属	幕臣	34	
	(永井久一郎)	K Nagai			尾張	20	留学生
3月 6日	(中原国之助)	K Nakahara			山口		留学生（名和道一に同行）
3月 7日	瓜生　震	F R Wuriu	肥田為良理事官随行	鉄道中属	福井	19	
	(ムトウサイ)	Sai Mutoo					不詳
3月11日	(ベツィオ・ジャクソン)	Betsio Jackson					不詳
3月14日	(松村淳蔵)	J Matjmulla			鹿児島	30	留学生
	(大原金之助)	K Ohara			鹿児島		留学生
	大久保彦之進	H Okubo			鹿児島	13	随行留学生、副使・大久保嫡男
	牧野伸熊（伸顕）	S Makino			鹿児島	11	随行留学生、副使・大久保次男
3月16日	内海忠勝	T Outsmi	大使随行	神奈川県大参事	山口	29	
3月18日	大久保利通		副使	大蔵卿	鹿児島	42	
3月19日	川路寛堂	At Kawage	三等書記官	外務七等出仕	幕臣	28	
	安場保和	Yaskazu	田中光顕理事官随行	租税権頭	熊本	37	
	若山儀一	Wakayama	田中光顕理事官随行	租税権助	東京	32	
	(ロス・A・フィッシュ)	Ros A Fish					合衆国財務省
	田中不二麿		理事官	文部大丞	尾張	27	
	(新島襄)				安中	29	留学生
3月21日	木戸孝允	T Kido	副使	参議	山口	39	
	山田顕義	Yamada	理事官	陸軍少将	山口	28	2度目
	(来原彦太郎)	H Kuribara			山口	14	留学生、副使・木戸の甥(後に養子)
3月22日	中野健明	T A Nakano	佐々木高行理事官随行	権中判事	佐賀	28	
	佐々木高行	佐々木高行	理事官	司法大輔	高知	42	
	岡内重俊	岡内重俊	佐々木高行理事官随行	権中判事	高知	30	
	(児玉淳一郎)	Jun-ichi-row C. Kodama			山口		留学生
4月17日	山口尚芳		副使	外務少輔	佐賀	33	
4月23日	木戸孝允		副使	参議	山口	39	2度目
5月19日	木戸孝允		副使	参議	山口	39	3度目
6月28日	(深津保太郎)	H Fukats			静岡		留学生
	(酒井忠邦)	T Sakai			群馬	18	留学生
	(ナガサワ)	S Nagasawa					不詳（長沢鼎？）
	(高木三郎)	S Takaki			江戸	31	アメリカ在留弁務使館書記
7月25日	(キンソウ)	S Kinso					不詳
	(コンドウ)	Condo					不詳（近藤幸正？）
	(カネマツ)	Kanematz					不詳
	(ヨスケ)	Yoske					不詳
	(イワモト)	Iwamoto					不詳（岩本勝之助？）
	(ウツノミヤ)	Utznomiya					不詳
	(オカダ)	Ocada					不詳

出典：『レジスター・オブ・ビジターズ』(スミソニアン・インスティテューション・アーカイブス所蔵)、田中（2002)、富田（1985)、新島（1987）等を基に作成

は、日付を追って、使節団員の同所視察状況を辿ることとする。使節団一行は、1872年2月29日にワシントン入りをし、3月4日には使節の主要任務の1つであるグラント大統領謁見・国書捧呈を終えている。その後、6月9日から22日までニューヨーク、ナイアガラなど北部を巡覧し、7月27日ヨーロッパに向けてワシントンを出発した。

(1) **2月28日**

『レジスター』に見られるトダという人物は不詳である。

(2) **3月1日**

『レジスター』に、理事官・陸軍少将の山田顕義(山口、28)、二等書記官・外務七等出仕の長野桂次郎（幕臣、29）の署名が見られる。長野桂次郎、すなわち立石斧次郎は通訳見習いとして万延元年遣米使節団にも参加したが、その際にもスミソニアン・インスティテューションを視察している。この訪問は、2月29日にワシントン入りした翌日であり、前回の訪問時の印象が長野に強く残っていたために、このような到着早々の視察へとつながったのかもしれない。

(3) **3月4日**

『レジスター』によると、理事官・戸籍頭の田中光顕（高知、29)、大使随行・兵庫県権知事の中山信彬（佐賀、30)、田中光顕理事官随行・検査大属の杉山一成（幕臣、29)、田中光顕理事官随行・租税権大属の富田命保（幕臣、34)、および留学生の永井久一郎（尾張、20）が視察した。永井は、尾張藩の命により1871年からアメリカで英語を学んでいた(富田編 1985：420-421)。使節団員の署名と永井の署名は離れているため、彼らは別々に訪問したと推察される。

(4) **3月6日**

『レジスター』に中原国之助（山口）の署名が見られる。彼は、1871年少弁務使森有礼（鹿児島）に随行した名和道一（山口）にしたがって渡米し、政治学を学んでいた（富田編 1985：434、450)。

(5) **3月7日**

『レジスター』には肥田為良理事官随行・鉄道中属の瓜生震（福井、19）の記帳が見られる。瓜生の次の記帳者、ムトウ・サイという人物は不詳である。瓜生はその後3月9日に英国に向けて出発しており、ワシントン滞在は10日という短いものであった。彼は、公務の合間をぬって関心のあるところを視察したものと推察されるが、スミソニアン・インスティテューションもその1つだったであろうことを示唆するものである。

(6) **3月11日**

『レジスター』には、Betsio Jackson, Japanという署名が見られるが、この人物は不詳である。

(7) **3月14日**

『レジスター』には、1867年に森有礼らとともに渡米し、その後アナポリス海軍兵学校で学んでいた松村淳蔵（鹿児島、30)、1870年からアメリカに留学していた大原金之助（鹿児島）とともに、使節団随行の留学生であり副使・大久保利通嫡男・大久保彦之進（鹿児島、13)、同次男・牧野伸熊（伸顕）（鹿児島、11）の記帳が見られる（富田編 1985：155、547)。ここでは、同郷の者たちが固まって視察していた様子が窺える。

(8) **3月16日**

『レジスター』に大使随行・神奈川県大参事の内海忠勝（山口、29）の記帳が見られる。

(9) **3月18日**

新聞史料によれば、副使・大蔵卿の大久保利通（鹿児島、42)、およびその通訳を務める日本公使館のチャールズ・ランマン（Charles Lanman）が、スミソニアン・インスティテューションを訪問した。ヘンリーは大久保を歓待し、日本の歴史について話し合った。大久保は博物館の珍しい物に非常に関心を示した（*Washington Evening Star* 1872. 3. 19)。なお、『レジスター』には大久保の署名は見られない。

その日午後3時から5時過ぎまで、大久保は木戸、伊藤、山口、森等と外務省に赴いて、条約改正の会談をし（木戸 1967：146)、また、2日後に帰国の途についていることから（久米 1977：212)、大久保が過密スケジュールの中でヘンリーとの会見を行ったことがわかる。

(10) **3月19日**

『レジスター』には、三等書記官・外務七等出仕の川路寛堂（幕臣、28)、田中光顕理事官随行・租税権頭の安場保和（熊本、37)、田中光顕理事官随行・租税権助の若山儀一（東京、32）および、合衆国財務省のロス・A・フィッシュ（Ross A Fish）の署名が

見られ、フィッシュが租税担当者を案内したものと推察される。

『新島襄全集6』の書簡によると、留学生の新島襄（安中、29）と理事官・文部大丞の田中不二麿（尾張、27）は、パテント・オフィスとスミソニアン・インスティテューションを訪れた。両施設とも、建物の係員による特別な配慮により、一般見学者よりも首尾よく見学する機会を得たという（新島1985：102）。新島は、岩倉使節団にアメリカの教育制度についての知識を授けるために、森有礼に招請されていた。なお、『レジスター』には両名の署名は見られない。

(11) 3月21日

『レジスター』には、副使・参議の木戸孝允（山口、39）、山田顕義、木戸の甥（後に養子）でアメリカ留学中の来原彦太郎（山口、14）の記帳が見られる。『木戸日記2』（1967：146-147）には、木戸は山田と博物官［ママ］に行ったと書かれており、来原についての言及はない。今回、『レジスター』によって、はじめて来原の同行が明らかとなった。木戸は、同郷の山田とともに行動することが多かった。木戸はこの山田および身内の来原という気のおけない者達とともに、10時頃から2時頃まで時間をかけて同所の視察をした。この訪問はスミソニアン・インスティテューションから正式な招待を受ける前であるが、すでに同所を視察していた山田が木戸に同所の視察を促したのであろうか。3月23日に来原は留学先のアマーストへ戻っており、その前に栗原が関心のありそうな訪問場所として同所が選ばれたのかもしれない。

(12) 3月22日

『レジスター』には、理事官・司法大輔の佐々木高行（高知、42）、同随行・権中判事の岡内重俊（高知、30）、同随行・権中判事の中野健明（佐賀、28）、およびアメリカで刑法を修学中の留学生、児玉淳一郎（山口）の署名が見られる。児玉の案内で司法関係者がスミソニアン・インスティテューションを視察したと考えられる。

(13) 4月17日

『実記1』（久米1977：228）によると、スミソニアンの正式な招待により、副使・外務少輔の山口尚芳（佐賀、33）は同所に赴いた。『レジスター』の該当日は紛失しており、また、SIA所蔵のヘンリーの公式書簡、日記などにも招待に関する記録はない。しかしながら、後述するように、ヘンリーの岩倉使節団への関心を勘案すれば、彼が大久保の時と同様、山口を歓待したであろうことは容易に想像できる。

(14) 4月23日

『木戸日記2』（木戸1967：163）によると、木戸はペリーが下田から持ち帰った石が展示されている「一屋」を訪れた。その建物は、スミソニアン・ビルディングと同定されうる。上述したように、同ビルディングは1858年にパテント・オフィスから他の政府探検隊のコレクションとともにペリー・コレクションを受け入れていたからである。これは、木戸の2度目の訪問となる。

(15) 5月19日

『木戸日記2』には「カビトルの後方を一周しスミソニヤに至り」（木戸1967：177）とあり、木戸は3度目の訪問をした。

(16) 6月28日

『レジスター』には、留学生の深津保太郎（静岡）、酒井忠邦（群馬、18）、ナガサワ（不詳）とともに、ワシントンで森有礼の下に働くアメリカ在留弁務使館書記・高木三郎（江戸、31）の署名が見られる。高木が他の3人を案内したと推察される。

(17) 7月25日

『レジスター』に見られるキンソウ、コンドウ、カネマツ、ヨスケ、イワモト、ウツノミヤ、オカダは不詳である。

3．岩倉使節団員の日記等分析

以下では、岩倉使節団員がスミソニアン・インスティテューションおよびその博物館をどのように受けとめたのかを探究していく。そのためには、使節団員の日記、書簡などを分析すべきであるが、実際のところ、そのような史料には制約があることを認めざるを得ない。すなわち、長野桂次郎、内海忠勝らは、日記自体が現存しない。後に内務卿となり博物館運営に大きく関わったとされる大久保利通についてみると、『大久保利通日記2』（1969）は明治5年1月5日から6年10月14日の間を欠いており、また、『大久保利通文書』（1967-1969）に関連史料は見当たらない。『東久世通禧日記・下』（1993）は明

治4年7月13日から6年3月28日までの間を欠いている。また、佐々木高行の『保古飛呂比：佐佐木高行日記5』(1974) や福地源一郎の『懐往事談：幕末政治家』(1968) には、同所に関する記載は見られない。結果として、分析は、『実記1』、『木戸日記2』などの一次資料のほか、新聞史料などの二次資料にも頼った。

(1) **久米邦武**

久米の晩年の回顧録『久米博士九十年回顧録』(久米 1985) の下巻には、米欧回覧が詳述されているが、スミソニアン・インスティテューションに関する記載は見られない。

4月17日の視察について、『実記1』に以下のとおり記されている (久米 1977：228-9)。

> [三月] 十日 晴風烈シ 府ノ「スミソニヤン」学校ヨリ招状来ル、山口副使之ニ赴ク、此校ハ英人「スミツス」氏ナルモノ、家富ミ財ヲ譲ル子ナキヲ以テ、世ノ子弟ヲ教導セント志シ、諸国ニ建タル学校ノ一ナリ、府中ノ一大域ヲ占メ、庭園トナシ百卉ヲウヘ、艸ヲ蒔キ道ヲ払ヒ、其幽静ナルコト公園ニ譲ラス、中央ニ学校アリ、建築奇巧、中ニ玻璨室アリ、草木ヲ蓄へ、且器械諸件モ備足シ、府中屈指ノ大校ナリ

久米は、同所の由来を述べた後、敷地が広大で、草花が咲き、公園のようであったこと、建物が奇巧であったこと、屋内にはガラス・ケースの部屋があったこと、草木が保管されていたこと、器械なども備わっていたことなどに、言及している。久米の描写は具体性を欠き、短い。それは、「山口副使之ニ赴ク」という記述からも推察されるように、久米自身が同インスティテューションを実見しておらず、聞き書きや諸資料に頼ったことを意味する。その結果、スミソニアンは「学校」、「府中屈指の大校」として描かれることとなる。『実記1』の他所にも「士覓 [スミソニヤンと傍注] 学校」(201)、「「スミソニヤン」学校」(240) という記載が見られる。久米が同インスティテューションを学校と記述し、博物館とは表現していないことには留意すべきである。彼は、インスティテューションの訳語である「学校」に引きずられるかたちで同所を理解し、同所の本質とも言うべき博物館としての機能を見逃す結果となったと考えられる。後述する木戸は、同所を実見した結果、それを博物館と認識したことは興味深い。

(2) **木戸孝允**

木戸の3月21日の訪問については、『木戸日記2』(木戸 1967：146-7) に次のように記されている。

> 同 [二月] 十三日晴十字頃より山田市彦太と博物官 (傍注：マヽ) に至る二字頃帰宿五州鳥獣虫魚の類 尤皮形或は干或は陶漆器 インジヤ之器物又本 朝の織物等 曾て使節来りし節持参せしもの歟 列す楼上にインジヤ人漁猟其他風俗形様等模写せし畫数百枚あり且此隣地草木室あり諸邦より様々の種類を集めり又一の奇観也

この記述と、前述のスミソニアン・インスティテューションの当時の状況を照らし合わせると、木戸は、本館1階の鳥獣虫魚の動物コレクションや、中2階や2階の先住民の器物、日本の織物等の人類学コレクションを視察したことがわかる。この日本の物は、万延元年遣米使節団の贈り物やペリーが持ち帰った物と考えられる。また同様に、2階に展示されていたジョージ・キャトリンによる先住民のスケッチも視察した。こうして木戸は、10時頃から2時頃まで時間をかけてスミソニアン・ビルディングを一巡した。その結果、諸国から様々なものを収集・展示している「博物官」という認識を持つに至った。『木戸日記2』の他所には、「ホリテク、ニク、インステチーション」の「インステチーション」に「学校」が併記されており (木戸 1967：208)、木戸はインスティテューションを学校と翻訳することもあるということがわかる。スミソニアン・インスティテューションを数回実見する機会を得た木戸がそれを学校と記さずに、博物館と認識・記述したという事実は、前述のように実見していない久米がそれを「学校」と記述したことを勘案すると、意味深長である。

なお、『レジスター』によって初めて同行が明らかとなった来原彦太郎は、木戸の妹ハルとその夫萩藩士来原良蔵との間の嫡男であり、後に木戸の養子となっている。この木戸の訪問は、スミソニアン・インスティテューションから正式な招待を受ける前であり、行動をともにすることの多かった同郷の山田、甥の来原という気のおけない者達との視察となった。

木戸は、この他、4月23日にも同所を訪問した。

> 同 [三月] 十六日晴……傍に老翁あり余等を誘ひ一屋に至る此處に各国より贈る處の種々の石

あり其中に我日本より来る所のものあり嘉永甲寅の歳下田港より出すとあり則ヘルリ之日本に来る此前年六月也数百年の鎖国此際より一変せんとするの折也此石尋常の凡石にして他日国内の珍石を撰ひ贈らむことを発思せり（木戸1967：163）。

訪問場所は「一屋」となっているが、前述したとおり、ペリーが下田から持ち帰った石が展示されていたということによって、それはスミソニアン・ビルディングと同定されうる。木戸は、それが平凡なものであったので、他日、珍石を選んで贈ることを思いついた。その土地固有の普通の石ではなく、珍しい石を展示するべきだという木戸の博物館観が読み取れる。

この他5月19日にも、木戸はスミソニアン・インスティテューションを視察したが、このように数回におよぶ視察は、3月1日から兵部、文部の事に主として関係することになったことも影響していると考えられる（木戸1967：142）。

(3) 大久保利通

前述したように、『大久保利通日記2』(1969) は、明治5年1月5日から6年10月14日の間を欠いている。ヘンリーと大久保の会談の様子については、その時通訳を勤めた日本公使館チャールズ・ランマンが以下のとおり記録を残している。

……スミソニアン・インスティテューションにおいて大久保氏がジョセフ・ヘンリー教授と行った会見は、とりわけ調和的であり、両グループにとって有益であった。会話が日本の食べ物に至り、大久保氏が同国では四つ足は一般的でないと言うと、ヘンリー教授はすぐさま大きな地球儀の方を向いて、その島国の帝国[日本]を指し示しながら、「日本人は、宗教的偏見がなくとも、国土が限られており十分な数の家畜の放牧ができないから、決して牛肉を食べる民族にはならないだろう」と言った。彼はさらに、「すべての民族の習慣は地理的特徴に常に影響を受ける」と述べた。大久保氏はこの示唆に感銘を受けたようであり、聞いたことを丁寧に書き留めた。先住民の矢尻が数多く展示されているガラス・ケースを通った時に、ヘンリー教授が「日本にはこの種のものはないでしょう！」と言うと、大久保氏は「いいえ、これらの物は日本では非常に普通です」と即座に答えた。するとヘンリー教授は、その訪問者［大久保］が少し前に驚いたのと同じくらい驚いた。こうして地球の両側からのこの2人の代表者たちは1、2時間ほど、彼らの聞き手と同様に互いにもてなした。大久保氏は電気についての小講義も受け、スミソニアン・ビルディングを去る時に、「彼はあなたの国の最も偉大な人物の1人だと確信している」と静かに述べた（Lanman 1883：171）。

確かに大久保は、資料がガラス・ケースに保管・展示されている博物館を体験したが、ヘンリーの研究者としてのインパクトが強かったがために、スミソニアン・インスティテューションの研究機関としての側面をより強く認識したかもしれない。

なお、同インスティテューション視察の折に大久保が残したとされるメモに関して、『大久保利通文書』(1967-1969) に関連史料は見当たらない。

(4) 田中不二麿

田中は、帰国後『理事功程』(田中 1982) を執筆し、文部省の最高責任者として博物館政策に大きく関わった人物である（椎名 1988：44）。『理事功程』には博物館の記載がないが、後述するように、『大使全書』「理事官に対する勅旨」には、博物館視察がその任務に挙げられていた。一方、田中の日記は現存しないし、また、伝記『子爵田中不二麿傳』の社会教育の項では、「図書館、博物館、展覧会、博覧会、図書、新聞及び雑誌のことは茲に省くことゝする」（西尾 1934：360）とある。このような史料の制約を受け、岩倉使節団員として諸外国の博物館を視察する間にどのように田中の博物館観が形成されたのかは不明である。しかしながら初めて洋行した田中にとって、スミソニアン・インスティテューションの博物館は興味深かったであろうと推察される。

なお、アマースト大学留学中の新島は、前述したとおり、田中の教育制度調査を手伝っていた。田中と新島は教育について大いに議論していたことから（新島 1987：98)、同インスティテューション視察後、博物館の役割等も話し合ったと考えられる。

(5) 川路寛堂

川路は、1866年、幕府の留学生取締としての渡英経験をもち、岩倉使節団では通訳にあたった（富田

編 1985：207-208)。彼は、3月19日に通訳として租税関係者とともにスミソニアン・インスティテューションを視察したが、彼の日記は現存しないし、また岩倉使節団員としての詳細な活動を示す記録は残っていない。以下の新聞史料によると、川路は同インスティテューション視察以降もワシントン滞在中に同所と関わりを持つこととなった。

> 日本使節団書記官・川路氏は昨日［3月27日］、マイヤーズ（Myers）将軍［日本の迎接委員］に連れられ、インディアン局を訪問した。江戸に博物館を設立するために、アメリカやヨーロッパを旅行しながら、鉱物、植物、貝殻、珍しい物などの標本を収集するのが川路氏の意図である。インディアン局でニュー・メキシコ知事アーミー（Army）将軍は川路氏と会見し、ニュー・メキシコ準州の先住民の弓矢や鉱物の標本を贈呈した（*Washington Evening Star* 1872. 3. 28)。

この新聞史料は、川路が米欧視察の間に江戸の博物館用の標本を収集する任務を持っていたことを示唆する。しかしながら、前述のとおり、川路に関する史料には制約があるため、川路がなぜ、またいかに標本収集に関わっていたのかは明らかではない。江戸の博物館の設立というのが、具体的には何を指すのかも不明である。1871（明治4）年5月14-20日、招魂社境内で大学南校物産局主催の物産会が、1872（明治5）年3月10日～4月30日、湯島聖堂で文部省博物局主催の博覧会が開催された。その際、永久に寄託されたものもあったので、閉会後も1と6のつく日（31日は除く）に公開された。一方、1873（明治6）年3月、文部省博物局は博物館、書籍館、小石川薬園とともに、太政官所轄博覧会事務局に併合され、文部省系の博物館施設は一時的に消滅し、同時に標本コレクションも失うこととなった。こうした明治初年の博物館草創期にあって、文部省は実物標本を通じて教育するための博物館施設の必要性を痛感しており、そのためのコレクション収集は必須であった（椎名 1988：33-42、椎名 1989：54-59)。これらを勘案すると、川路の言う江戸の博物館は、文部省の博物館施設を指していたのかもしれない。

> 日本使節団の川路氏、他の団員、およびニュー・メキシコの前知事アーミーは、スミソニアン・インスティテューションを介して、日本の先住民アイヌとニュー・メキシコの先住民の風俗・習慣に関する情報を交換することを取り決めた。ニュー・メキシコの先住民と日本のアイヌの間にはかなりの類似性があるとされてきている（*Washington Evening Star* 1872. 4. 24)。

このような交渉過程で、川路らが、同インスティテューションは物を展示するばかりでなく、学術情報交換の媒介役としても機能することを学ぶ機会を得たことは、見過ごすべきではないだろう。

(6) 永井久一郎

留学生・永井は、岩倉使節団員ではないが、敷延しておきたい。彼は、アメリカでラテン語、英語を学び、日本に帰国後、文部行政に関わることとなった。彼は、1875（明治8）年、書籍館兼博物館勤務となり（同施設が廃止となったため、勤務は短かった)、後1879（明治12）年11月に内務省に移り、衛生事務担当となる。1884（明治17）年5月のロンドン万国衛生博覧会に、彼は、東京教育博物館長手島精一とともに派遣されている。1886（明治19）年3月に東京帝国大学書記官に転任し、1889（明治22）年には文部大臣主席秘書官となった（富田 1985：420-1)。内務卿となり博物館運営に大きく関わったとされる大久保利通とは異なり、永井は文部行政に直接的な権力を持っていたわけではない。しかし、実務方として博物館、文部行政に携わったことを考えれば、彼のスミソニアンでの体験は捨象すべきではないだろう。

4. 考　察

1872（明治5）年、ワシントン滞在中、延べ23名の岩倉使節団員がスミソニアン・インスティテューションを視察した。彼らが視察した同施設は、総合研究機関であり、人文・自然科学資料を収集・保管・展示する博物館を有していた。そのような博物館を経験した使節団員の中には、後に日本の博物館創設に直接関わることとなる文部大丞・田中不二麿ばかりでなく、明治政府の薩長藩閥実力者である副使・木戸孝允、大久保利通らも含まれていた。以下では、彼らのこのような体験を、博物館史において再評価していきたい。

(1) 視察の類型

① 使命誘導型：職務としての公式視察

当時のイギリスは、産業革命の最先進国であったということもあり、当地での岩倉使節団の見学施設の多さと多様さにおいては他国のそれを大きく凌駕するとされる。博物館史においても、同様の認識がもたれており、イギリスの視察博物館数は、「『実記』中に明記されているものだけを見ても、他に比較して最も多い。これは、滞在期間の長さと、博物館施設自体が、最も長期滞在したアメリカの場合、ヨーロッパに比較して未発達だったという理由が考えられる」（岩本 1998：6 ）という。このような認識の下に、岩倉使節団に関する研究ではイギリスが主題として取り上げられることが多かった。また、岩倉使節団によるウィーン万国博覧会参加についても多くの研究がなされてきた。こうした中、相対的にアメリカの博物館視察は看過される傾向にあった。

そこで、岩倉使節団員の職務に照らして、実際、使節団員、とりわけ文部関係が、アメリカの博物館視察をいかように要求されていたのかを確認しておきたい。

岩倉使節団の目的は、(1)条約締盟国を歴訪して、元首に国書を捧呈し、聘問の礼を修めること、(2)廃藩置県後の内政整備のため、欧米先進諸国の制度・文物を親しく見聞して、その長所を採り、日本の近代化をすすめること、(3)1872年７月１日が条約の改定期限に当たるので、日本の希望するところを締盟各国と商議する、すなわち条約改正の予備交渉をすることであった（田中 1977：40-41）。

岩倉使節団派遣は、オランダ系アメリカ人のお雇い外国人フルベッキ（G. F. Verbeck）の「ブリーフ・スケッチ」（Brief Sketch）が契機となって実現した。これは、日本政府が欧米への使節団を派遣すべき事を述べ、その目的と方法を示したノートであり、もともとは1869年にフルベッキが大隈重信に提出したものであるが、1871年に改めて岩倉具視に依頼されて復稿されたとされる（大久保 1976：38-44、54-55）。

「ブリーフ・スケッチ」の中に、アメリカと文部省に関する次のような記述がある。

> Remark 2 ……the only countries whose institutions are to be thoroughly studied, as pointed out above, are France, England, Prussia, Holland, and the United States……One country, for instance England, may be specially instructive in the branch of Foreign Affairs;……another, probably Prussia or the United States, in the Educational Department……（田中 1991：368-9）

アメリカは、フランス、イギリス、プロシア、オランダとともに諸制度全体を十全に研究すべき国であるとし、さらに、プロシア、アメリカは文部省において有益であるとする、この示唆は再認識されるべきであろう。確かに、当時イギリスは最先進国であったが、このフルベッキの示唆によって、文部大丞田中不二麿をはじめとする文部関係者がアメリカに注目していたことを確認することができる。

さらにフルベッキは、「博物館」視察に関しても、「一米人フルベッキより内々差出候書」の中で言及している。同書は、岩倉使節団派遣とからんで、使節団首脳に密かに提出されたとされる。その中の「大使一行ノ回歴シタル顛末ヲ著述スル法」は、岩倉使節団帰国後の報告書編纂のための要項とみられるが、「各国ヲ経歴スル間ニ実践シテ以テ利益トナルベキ件々、大抵左ノ如シ」とする中に、「博覧公会」、「万物庫書庫」が挙がっている（田中 1991：371-4）。さらに、「……米利堅、孛漏生、其余英吉利、法朗西、荷蘭、魯西亜等最善美ナルモノニ就キ、目今行ハル丶景況何如ヲ顧ミ、彼我良否相距ルノ遠キ教育ノ素アルヲ察シ、遍ク利弊ヲ洞悉シ、他日実験ニ従事センヲ要ス。今其講究スベキ目的ヲ掲ゲ、之ヲ左ニ開列ス。」として全32項目を列記しているが、その中に「博物府之事」、「図書庫之事」が挙がっている（田中 1991：380）。

このようなフルベッキの方針を反映するかたちで、『大使全書』の「理事官に対する勅旨」には、使節団の各省理事官は、欧米諸国において各省の緊要の事務等を視察し、その方法を研究して日本で施行することを目的として派遣され、その調査結果の功程の報告書を作成するべきであると示されている（大久保 1976：200）。同書「各理事官調査予定項目の上申」において、田中文部大丞は、「博物府之事」、「図書庫之事」を挙げている（大久保 1976：206-7）。

これらを勘案すると、岩倉使節団は、ヨーロッパ同様、あるいは、文部省関係と言う点ではそれ以上

に、アメリカにおいて博物館を視察することが求められていたと言えよう。

理事官・文部大丞の任にあった田中不二麿は、職務として、学校施設や博物館を訪れる必要があり、実際新島とともにスミソニアン・インスティテューションを訪れた。使節団の見学先は、政府や受入先の地方自治体、迎接委員会、当該施設等によって、あらかじめ用意されている事が多かったが、このような視察は公式の視察、すなわち公務ととらえられるであろう。山口尚芳は、同所の招待を受けての訪問であり、大久保利通は、日本公使館のチャールズ・ランマンを伴っての訪問であり、また、租税担当者はアメリカ合衆国財務省のフィッシュの案内による視察と考えられる。これらは、いずれも公式訪問であり、使節団員としての使命誘導型視察として位置づけられるだろう。

② 好奇心駆動型：個人的関心による非公式視察

岩倉使節団は、横浜出帆の後、サンフランシスコで西洋文明の洗礼を受け、その後、完成間もない大陸横断鉄道に乗り、西部、中西部の広漠とした原野を横断し、首都ワシントンに到着する。当地で、彼らは、目的の一つである大統領に謁見し、国書を捧呈した。条約改正の交渉に絡んで、大久保利通、伊藤博文両副使が一時帰国したため、残りの使節団員はワシントンで予期せぬ長期滞在を強いられた。その結果、使節団員は当地で諸施設を訪問する機会が増えることとなった。

首都ワシントンは政治の中心であり、後の訪問地である産業の中心ニューヨークとは、自ずと景観が異なる。ワシントンには、賑やかな市場はないが、人目を引く壮大な建築物が多くあった。国会議事堂を初めとする、ホワイトハウス、財務省、陸軍省、国務省、郵便局、パテントオフィスなどの壮大な政府建築物は、「ミナ白石」であった（『実記１』201）。一方、スミソニアン・ビルディングは赤く、しかも複数の塔を有する城のようであり、他の建築物とは好対照をなしていた。

このようなスミソニアン・ビルディングの外観が、日本人の好奇心を喚起したとしても不思議ではない。ワシントン滞在期間10日という瓜生震が公務の合間を縫って単身で視察したのも頷ける。この他にも、大久保彦之進、牧野伸熊（伸顕）や、司法関係者が、それぞれ留学生を伴って同所を訪問しているが、これらは皆、非公式、自発的、あるいは好奇心による視察と言えるだろう。また、副使・木戸孝允はしばしば大使と別行動をとっていたとされるが、実際スミソニアン・インスティテューションの視察については、甥を伴ったり、あるいは老翁に誘われて行ったりと、非公式であることが判明した。木戸の３度にわたる同所訪問は、３月１日から兵部、文部の事に主として関わることになったことと関係があるかもしれない。さらに、長野桂次郎は、万延元年遣米使節団員として同所を訪れているが、その時の印象がよほど強く残っていたのであろうか、ワシントン入りの翌日に視察している。これらの非公式な視察は、関心に喚起されたものであり、好奇心駆動型として位置づけられるだろう。

(2) 視察の評価

① 博物館の理解：共時的視点から

「アメリカは使節団が最初に足を印した国であっただけに、目にするもの耳にするものは、すべて珍しくかつ鮮烈だった」とされる（田中・高田 1993：15）。使節団の中には、洋行経験者もいたが、ほとんどの者にとって、アメリカは最初の異国だったのである。こうした中、岩倉使節団員は公式・非公式を問わず、スミソニアン・インスティテューションおよびその博物館を視察する機会を得た。ヨーロッパに先駆けて実見した同博物館は、使節団員にとって印象深い施設の１つだったであろうと推察されるが、それが人文・自然科学資料を収集・保管・展示しており、まさに「博物館本来の姿」（金山 2001：58-59）を示すものであったことは注目に値する。

日本の博物館概念を形成したり、博物館創設に与った先駆的人物としては、町田久成、田中芳男、佐野常民、田中不二麿らが挙げられ、それらの博物館思想が研究の主題となってきた。しかしながら、明治初年における彼らの「博物館思想と、それに由来する政策は、もはや個人の経験をベースに単独で形成されたというよりもむしろ、時代の思潮なかんずく時の政府首脳に共有された経験との相互作用の中で形成されたと見た方が妥当」（岩本 2000：34）という指摘もみられる。筆者もまた、幕末・維新期の遣外使節団の、さらに広くは留学生までをも含めた、多くの人々が博物館というものを見聞・体験し、それら

が蓄積されていった結果、日本において博物館概念がつくられていったと考える。そのような観点から、岩倉使節団員および留学生が共時的にスミソニアン・インスティテューションおよびその博物館を体験したという事実は、再評価されるべきであろう。

② 博物館の理解：通時的視点から

使節団員がどれほど博物館を理解することができたかという点において、久米の博物館理解は狭いものであったとされ、「明治初期の開明派知識人の「博物館」思想の限界」として評価される向きもある（松宮 1995：272）。しかしながら、博物館で展示物を自由に見て回った木戸は、同インスティテューションには人文・自然科学資料が収集・保管されていることを理解し、一方、ヘンリーと直接会見する機会を持ち、科学者ヘンリーに感銘を受けた大久保は、博物館としてだけではなく研究施設としての一面も読み取ったことであろう。このような各人の博物館理解は、たとえ未熟なものであっても、日本社会で博物館概念が形成されていく一過程として評価されるべきであろう。すなわち、使節団員の経験は、共時的体験としてのみ捉えるのではなく、通時的にとらえる必要もあろう。たとえば長野桂次郎は、前述したように、万延元年遣米使節団参加時に続いて2度目のスミソニアン・インスティテューション視察を行った。彼は、前回の体験を比較基準として、同所を認識・理解していったものと考えられる。

このような観点から、岩倉使節団員のスミソニアン・インスティテューションでの経験が日本の博物館発展過程においていかに影響したのかを見る必要もあるだろうが、実際のところ、それを端的に示す記述は、久米文書、大久保文書、木戸文書などには見当たらない。そのような史料の制約を受け、彼らの同所での経験は、これまでの博物館史研究において取り上げられてこなかったと考えられる。しかし、端的に示す史料が残っていないとしても、彼らの体験は、後の博物館の発展過程に「与った」と考えてよいだろう。以下では、博物館政策に大きく関わった後の内務卿大久保利彦とランマンとの関わりを示す事例を紹介したい。

ランマンは、1878（明治11）年初めに矢尻や先住民の他の遺物の数多くの写真コレクションをオリジナルの標本とともに入手したので、それを日本の大久保に送った。大久保は、ランマン宛に次のように返信している。

東京、5月11日、明治11年

拝啓

1878年2月20日付の手紙を拝受いたしました。数年前、あなたのご案内でスミソニアン・インスティテューションを訪問する機会を得て、先住民の矢尻や他の石器を見た時、同様の過去の遺物がわが国でも発見されるという事実を述べました。あなたが問題の遺物のプレートと写真を送ってくださったので、その事実を思い出しました。ここにお礼を申し上げます。これらの写真は、間もなく我々［内務省］の博物館に整理され、我々の歴史研究者にとって非常に興味深い物となるでしょう。返報として、当博物館の管理者に日本の古代の石器や土器のコレクションの写真の複製を作るよう命じているので、出来次第お送りします。

敬具

大久保利通、内務大臣

この返信を書いたわずか2週間後の5月24日、大久保は暗殺される。1879年、ある東京の新聞は、ランマンが以前送った写真と標本について取り上げ、日本の矢尻の同様の写真がアメリカからの絵と並べて帝国博物館に展示されたと報じた。大久保亡き後、博物館関係者によって、最終的に1881年6月、興味深い絵のコレクションが日本からランマンのもとに届けられた。描写された標本は154にものぼった。日本の矢尻は、大きさ、形、石の種類において、合衆国の物とよく似ており、人類学者の関心を喚起するように見えた。写真には、遺物が発見された地域などを示すリストが添付されていた（Lanman 1883：171-5）。この事例は、大久保の同インスティテューション視察が、後に内務省博物館のコレクション受入れへと繋がる過程を示すものであり、さらに、同博物館が他国とコレクション（およびその情報）交換する状況をも示すものであり、大変興味深い。

③ 日米友好関係の構築

ヘンリーは、万延元年遣米使節団が訪米した際、西洋文明を知らしめるためにはアメリカの高度な科学を示すのが重要であるとし、それを具現化しうるものの1つがスミソニアン・インスティテューションで

あると自負していた。遣米使節団を同インスティテューションに招待することを熱望し、彼は大統領や迎接委員に積極的に働きかけた（財部 1999：64-66）。1871年のスミソニアンの年報の中で、彼は「インスティテューションは西洋文明の採用に関して日本の歴史的な動きに大きな関心を寄せてきた」と表明しており、日本を西洋文明化させたいという熱望は変わっていないことが読み取れる（Henry 1873a：36）。

こうした中、ヘンリーは、当然のこと、岩倉使節団にも高い関心を寄せていた。それは、1872年3月13日付ドール（William Healey Dall）宛書簡の中で、「ワシントンにおいて目下のところ最も関心が持たれているのは、日本使節団の訪問である」と記していることからも明らかである（SIA）。なお、ドールは博物学者であり、ベアードの尽力で1871年に合衆国沿岸調査所に入り、アラスカ南西部のアリューシャン列島などの科学調査に従事していた（DAB3 1930：35-36）。

これら万延元年遣米使節団や岩倉使節団の他にも、日本と同インスティテューションの接触が見られた。湯島の私塾・日新舎学長福地源一郎（大蔵省出仕）は、1870年11月の伊藤博文の米国貨幣制度調査に随行した。福地は、合衆国滞在中に、ヘンリーと接触を持った。彼は、1871年3月13日付のヘンリー宛の書簡の中で、「江戸の湯島の図書館にスミソニアン・インスティテューションが配布しているレポートなどを置くことを熱望しています。その返報として、あなたの関心に沿うような日本の植物相や人類学の何かを寄贈します」（SIA, Official Incoming 98：65）と述べる。1871年3月20日付の返事の中でヘンリーは以下のように述べている。

> スミソニアンの出版物一揃えを送る準備ができております。また、いくつかのシリーズは今後も送らせていただきます。……返報のお申し出を感謝します。できましたら、自然科学の挿絵集が好ましいです。日本ではその種の出版物が作られ、その多くが日本の博物学の挿絵であると理解しています。……スミソニアンが管理する国立博物館の人類学コレクションを完全にする上で、日本の民族学の標本も受け入れたい。日本に特有な民族学標本、とりわけペリー提督や日本駐在アメリカ公使などが合衆国にもたらして我々の博物館にすでにあるコレクションの補足となるような物と同様に、万一、石器のような日本の文明の初期段階の遺物が入手できれば喜ばしい。日本の博物学標本、とりわけ異なる種類のキジの皮の入手にも関心があります。一方、オオサンショウウオにも関心があります。それは、水生動物で、数フィートの長さがあり、ワニのような形状だが皮膚はなめらかです。その動物の正確な名前や生息地はわかりませんが、この我々の描写によって容易にご理解いただけると思います……（SIA, Official Outgoing 23：475）。

1871年のスミソニアンの年報によると、同インスティテューションは実際1871年に同所の出版物一揃えを江戸の大学に贈った。このほかにも同所は、森有礼のために、日本のコミッション調査用の教育関係出版物を、合衆国の主要な教科書出版社に対して寄贈するよう求めたりもした。同所は日本の気象観測データ、考古学・博物学の標本を日本から入手するための準備も行った（Henry 1873a：37）。

上記のような日本とスミソニアン・インスティテューションとの接触から、以下のようなことが指摘できるだろう。

第1に、万延元（1860）年遣米使節団以降、日本と同インスティテューションは着実に友好関係を築き上げていったことが窺える。これは、ひとえに、日本を西洋文明化させたいというヘンリーの熱意によるところが大きい。ヘンリーは、万延元年遣米使節団、岩倉使節団、貨幣制度調査団のほかにも、開拓使顧問ホーレス・ケプロン（Horace Capron）や文部省学監デヴィッド・マレー（David Murray）をはじめとするお雇い外国人とも関わりがあったとされる（原田 1975：86、149）。教育博物館の国外・外国人からの寄贈資料について、公共施設の中では博物館からの寄贈が件数、点数ともに最多であるが、その中でスミソニアン・インスティテューションが首位を占めている（椎名 1988：78）。標本交換システムは一朝一夕で構築できるものではない。上述のようなヘンリーと日本との長期的かつ友好的関係があったからこそ、他国の博物館に先駆けてスミソニアン・インスティテューションとの交換が可能となったのではないかと筆者は考える。今後は、年次別の標本授受調査や、書簡授受調査を行い、長期的な

視点から日米間の関係を見ていく必要があるだろう。

第2に、ヘンリーは、日本の西洋文明化を強く望んでいたが、その一方で、日本の民族資料、自然資料などのコレクション獲得にも意欲的であったことが窺える。1872年のスミソニアンの年報のコレクション追加リストによると、森有礼が日本の金貨・銀貨セットおよび日本の人類学標本を寄贈している(Henry 1873b：59)。1872年4月25日付ヘンリー宛の森の書簡によると、この人類学標本は、当時の江戸の地図、9世紀以前の都に建てられた政府建造物の平面図、石や金属製の矢尻、石斧、石の遺物である（SIA)。これまでの博物館史研究では、西洋の博物館が日本に及ぼした影響ばかりが注目される傾向にあったが、上記事例は、日本が西洋の博物館に及ぼした影響を示唆するものである。今後は、日本が西洋の博物館を受容した側面ばかりではなく、西洋の博物館との相互作用、さらに言えば西洋の博物館の活動展開との関連も考慮していく必要があろう。

おわりに

本稿では、延べ23名の岩倉使節団員およびアメリカ滞在中の留学生ら20名が、スミソニアン・インスティテューションとその博物館を視察したことを明かにした。これまで、岩倉使節団と博物館に関する論考は、そのほとんどが大英博物館をはじめとするヨーロッパの博物館やウィーン万国博覧会に焦点が定められる傾向にあり、結果として、岩倉使節団による同インスティテューション視察は、博物館史から抜け落ちてきた。

前述したように、『実記1』のスミソニアン・インスティテューションについては簡単な記述にとどまる一方、『実記2』の大英博物館の項は、「『実記』において、博物館に対する考えが、もっとも多くの字数を費やして説かれている」(武田1993：104-107)。

> 大英博物館「ブリツチ、ミジエァム」を見学し、「国ノ成立スル、自ラ結習アリ、習ヒニヨリテ其美ヲ研シ出ス、知ノ開明ニ、自ラ源由アリ、由ニヨリテ其善ヲ発成ス、其順序ヲ瞭示スルハ博物館ヨリヨキハナシ、古人云、百聞ハ一見ニ如カスト、寔ニ目視ノ感ハ、耳聴ノ感ヨリ、人ニ入ルコト緊切ナルモノナリ（久米1978：114)

この『実記2』の記述を受け、使節団は「大英博物館を見学し、それぞれの国の「知ノ開明」の由ってくるゆえんを目で体感することの重要性を述べている」(田中・高田1993：21）とされる。

確かに久米は大英博物館に感銘を受けただろう。しかし、編者の久米が大使・岩倉の私設秘書として岩倉に随行していたことによる『実記』の史料的な制約を考慮しなければならない。すなわち、『実記』は実見部分だけではなく、聞き書きや諸資料に頼った箇所もあり、必ずしも使節団の行動を網羅してはいないのである。

『実記』は公式報告書であるが、「一種のエンサイクロペディア」でもあった（田中・高田1993：42-50)。あい次いで増刷され、また予約月賦販売方式もとられ、読者層を次第に広げていったことを勘案すれば、確かに『実記』は影響力をもっていた。その結果、近年まで博物館研究において、『実記』の中で記載が多い大英博物館やウィーン万国博覧会が取り上げられることが多く、相対的に記述の少ないアメリカの博物館は看過されがちであった。博物館研究において西洋の博物館の受容過程を探究する際、日本に残る史料のみに頼ることなく、筆者が行ったように現地史料の発掘・分析を進める必要があるだろう。

謝　辞

本誌の匿名の査読者の指摘によって改稿を行った。有益な指摘に感謝したい。

[文献]

Baird, Spencer F. 1859 "Appendix to the Report of the Secretary" *Annual Report of Smithsonian Institution, 1858*, Smithsonian Institution：44-62.

Dictionary of American Biography (DAB) 3 1930 Charles Scribner's Sons

Field, Cynthia R et al. 1993 *The Castle: An Illustrated History of the Smithsonian Building* Smithsonian Institution Press

福地源一郎1968『懐往事談：幕末政治家』人物往来社

Hafertepe, Kenneth 1984 *America's Castle: The Evolution of the Smithsonian Building and its*

Institution, 1840-1878 Smithsonian Institution Press
原田一典 1975『お雇い外国人13：開拓』鹿島出版会
Henry, Joseph 1859 "Report of the Secretary" *Annual Report of Smithsonian Institution, 1858*, Smithsonian Institution：13-43.
Henry, Joseph 1866 "Report of the Secretary" *Annual Report of Smithsonian Institution, 1865*, Smithsonian Institution：13-74.
Henry, Joseph 1871 "Report of the Secretary" *Annual Report of Smithsonian Institution, 1870*, Smithsonian Institution：13-45.
Henry, Joseph 1873a "Report of the Secretary" *Annual Report of Smithsonian Institution, 1871*, Smithsonian Institution：13-41.
Henry, Joseph 1873b "Report of the Secretary" *Annual Report of Smithsonian Institution, 1872*, Smithsonian Institution：13-52.
Henson, Pamela M. 2000 "Spencer Baird's Dream: A U. S. National Museum" Ghiselin, Michael T. and Alan E. Leviton, ed. *Cultures and Institutions of Natural History: Essays in the History and Philosophy of Science* California Academy of Sciences: 101-126
東久世通禧（霞会館華族資料調査委員会編纂）1993『東久世通禧日記・下』霞会館
Hinsley, Curtis M. 1981 *The Smithsonian and the American Indian: Making a Moral Anthropology in Victoria America* Smithsonian Institution Press
岩本陽児 1998-1999「岩倉使節団の米欧博物館見学：イギリスを中心に」『博物館学雑誌』第24巻第1号：1-10、第2号：1-18
岩本陽児 2000「木戸孝允の米欧における博物館理解の形成」『博物館学雑誌』第26巻第1号：23-36
金山喜昭 2001『日本の博物館史』慶友社
木戸孝允 1967『木戸孝允日記2』東京大学出版会
久米美術館編 1999-2001『久米邦武文書1-4』吉川弘文館
久米邦武 1985『久米博士九十年回顧録・下』宗高書房
久米邦武編 1977『特命全権大使米欧回覧実記1』岩波書店（岩波文庫）
久米邦武編 1978『特命全権大使米欧回覧実記2』岩波書店（岩波文庫）
久米邦武 1988-1991『久米邦武歴史著作集1-5』吉川弘文館
Kume, Kunitake 2002 *The Iwakura Embassy 1871-1873 : A True Account of the Ambassador Extraordinary & Plenipotentiary's Journey of Observation Through the United States of America and Europe* Japan Documents
Lanman, Charles 1883 *Leading Men of Japan* D. Lothrop
松宮秀治 1995「万国博覧会とミュージアム」西川長夫・松宮秀治編著『『米欧回覧実記』を読む：1870年代の世界と日本』法律文化社：229-278
Moyer, Albert E. 1997 *Joseph Henry: The Rise of an American Scientist* Smithsonian Institution Press
長島要一 1993「デンマークにおける岩倉使節団」田中彰・高田誠二編著『『米欧回覧実記』の学際的研究』北海道大学図書刊行会：163-181
中野美代子 1993「『米欧回覧実記』における動物園見学記録と動物観」田中彰・高田誠二編著『『米欧回覧実記』の学際的研究』北海道大学図書刊行会：227-240
新島襄『新島襄全集3』同朋舎出版 1987
新島襄『新島襄全集6』同朋舎出版 1985
西川長夫・松宮秀治編著 1995『『米欧回覧実記』を読む：1870年代の世界と日本』法律文化社
西尾豊作 1934『子爵田中不二麿傳』咬菜塾
大久保利謙編 1976『岩倉使節の研究』宗高書房
大久保利通 1967-1969『大久保利通文書』東京大学出版会
大久保利通1969『大久保利通日記2』東京大学出版会
Register of Visitors（Smithsonian Institution Archives）
Rhees, William J. 1857 *An Account of the Smithsonian Institution, its Founder, Building, Operations, etc.* Thomas McGill Printer
Rhees, William J. 1863 *Guide to the Smithsonian Institution and National Museum* Collins Printer
Rhees, William J. 1869 *The Smithsonian Institution*

and National Museum Collins Printer
Rivinus, E. F. and E. M. Youssef 1992 *Spencer Baird of the Smithsonian* Smithsonian Institution Press
佐佐木高行 1974『保古飛呂比：佐佐木高行日記 5』東京大学出版会
椎名仙卓 1988『日本博物館発達史』雄山閣出版
椎名仙卓 1989『明治博物館事始め』思文閣出版
財部香枝 1998「幕末における西洋博物館の受容：万延元年（1860年）遣米使節団が実見した博物館」名古屋大学情報文化学部・名古屋大学大学院人間情報学研究科研究紀要『情報文化研究』第 8 号：161-179
財部香枝 1999「幕末における西洋自然史博物館の受容：万延元年（1860年）遣米使節団とスミソニアン・インスティテューション」『博物館学雑誌』第24巻第 2 号：63-79
Takarabe, Kae 2000 "Samurai at the Smithsonian: First Japanese Visitors to Western Museum in the U.S." Ghiselin, Michael T. and Alan E. Leviton, ed. *Cultures and Institutions of Natural History: Essays in the History and Philosophy of Science* California Academy of Sciences: 161-182
武田雅哉 1993「大英博物館を見たふたつの東洋」田中彰・高田誠二編著『『米欧回覧実記』の学際的研究』北海道大学図書刊行会：97-111
田中彰 1977『岩倉使節団』講談社 (講談社現代新書)
田中彰校注 1991『開国』（日本近代思想大系 1）岩波書店
田中彰・高田誠二編著 1993『『米欧回覧実記』の学際的研究』北海道大学図書刊行会
田中彰 2002『岩倉使節団の歴史的研究』岩波書店
田中不二麿 1982『理事功程』（明治初期教育稀覯書集成）雄松堂書店
富田仁編 1985『海を越えた日本人名事典』日外アソシエーツ
冨田幸光 2002『絶滅哺乳類図鑑』丸善
Washington Evening Star (Library of Congress)
Yochelson, Ellis L. 1985 *The National Museum of Natural History: 75 Years in the Natural History Building* Smithsonian Institution Press